

# 我、 鉄路を拓かん

第三回

梶よう子

## 第三章 海上の堤

一

鉄道敷設ふせつの話は、徳川政権崩壊直前の慶応年間けいおうに、仏蘭西フランス、  
アメリカアメリカからもちたられた。幕府は鉄道の有用性を認めながら  
も、尊王攘夷そんのうじやういの風が、すでに倒幕の嵐に変わりつつあった状況下  
においては不可能であると判断した。

ご一新後、旧幕府より鉄道敷設権を得ていると、亜米利加が外国  
官（外務省の前身）を通じ追認要求をしてきたが、新政府はこれを  
撥ねはつけた。

亜米利加による鉄道敷設は、土地の買い上げ、工事に伴うあらゆる  
経費をすべて負担、そして経営権も亜米利加が握り、その後、日  
本が望めば建設費の一・五倍で譲渡ゆずりかへするというものだった。

つまり、亜米利加経営の鉄道が日本を走るといふことだ。

これに英国公使のパークスが反応した。

「日本は、自らの意志で鉄道を敷設すべきだ」

と、新政府に力説した。

外国からの申し出を受け入れ、資本、経営を頼りきれば、植民地と同様の扱いを受けるやもしれない。新政府の威信も地に墮ちる。鉄道の利便性、有益性を十分理解し、日本が自らの意志で敷設すること——。

外国管轄方式でなく、自国管轄方式を目指す。

近代化は自らの手で成し遂げる。

新政府はパークスの言葉に力を得、亜米利加の要求を退け、

英吉利に協力を仰ぎ、日本主導の鉄道敷設を目指して動き出した。

その先頭を走ったのは、民部大輔を務める大隈重信と大蔵少輔を務める伊藤博文だった。

異国から金を借りるのはいかなものか、今は対外的軍備が急務では、などの反対の声が挙がったが、明治二年（一八六九）十一月五日、東京府麻布区の右大臣三条実美邸に英国公使パークスと政府高官が集った。鉄道敷設のための非公式な会談だ。

そこで、東京と京都を結ぶ鉄道の敷設を決定。

さらにパークスは、敦賀（福井県）から琵琶湖岸、そして京都へ

伏見く神戸間の敷設を提言した。

それから五日後、三条実美他、四名の大納言、六名の参議により、廟議決議がなされ、東京から京都の幹線鉄道、東京から横浜、琵琶湖岸から敦賀、京都く大阪く神戸を結ぶ鉄道敷設計画を正式に決定した。

非公式の会談に通訳として参席していた井上勝は、報を聞き、この日が、

「本邦鉄道経営の紀元なり！」

と、寄宿している伊藤博文邸で叫んだ。

「伊藤さん、大隈さん、酒だ、酒。いま祝わずしていつ祝うのですか」

「井上くん、嬉しいのは我らも同じだが、早まるな。敷設が決定されただけで、まだ問題が山積しているのだぞ」

伊藤が苦笑しながら、たしなめた。

「まずは敷設の費用だ。民間から金を集めるのは至難の業。新政府の財力は、江戸の頃でいえば大名ほどの石高だよ。一国を支える政府がな。かつての将軍家である徳川は八百万石だ。どれだけ新政府が貧しいかわかるだろう？ 英国から敷設の材料も買う、技術者も雇わねばならん。金が足らん。英国との借款の交渉もしているが、はてさて、借金はどれだけになるものか」

そうだそうだ、と大隈も同調する。

「だいたい、異国から金を借りる売国奴とまで罵られた。鐵路を敷く土地の買い上げもある。空家あきやになっていて没収した武家屋敷ならまだしも、庶民の土地となるとこれは厄介やっかいだ。商売をしている者なら立ち退きのを渋るしぶだろう。だいたい東海道を基に鐵路を敷くとなると——もつと面倒な者らがいるがな、なあ、伊藤くん」

伊藤がうむと深く頷うなずいた。

「もともと反対している兵部省ひやうぶしょうあたりが首を縦たてに振らんだろう。やれやれだ」

兵部省はそもそも軍備を求めており、鉄道敷設には反対している。  
「品川しながわ、高輪たかなわを通ることになるんだ。難癖なんくせをつけてくることは十分に考えられる」

大隈が唸うなった。伊藤も溜息ためいきを吐つく。

「おふたりとも、なにを気弱きじやくになっているのですか。ともかく今日ぐらいは、蒸気車が日本の地を走る姿を思い浮かべながら大いに呑のんで、喜びましょう。まず一步進んだんだ。屋敷にある酒では足りませんね、よし、酒屋へ行つてきます」

井上は、身を翻ひるがえした。が、不意に立ち止まって振り返った。

「あの、ところで、僕は鉄道敷設にかかわれるのでしょうかね？」

伊藤と大隈が、眼を見開いた。

「そういえば、井上くんは……」

と、大隈が首を傾げた。

井上は、大蔵省造幣頭兼民部省鉱山司こうざんしこうざんしやうを務めている。五年半に亘る英吉利国留学で培った語学力を買われて、先の三条実美邸での会談で通訳を務めたが、直に鉄道にかかわれる役職ではない。「それはないでしょう。僕は、英吉利国の大学で地質学、鉱山学を修めてきたので、確かに鉱山正は適任とは思いますがね、ですが、地質学も、鉱山学も、倫敦で蒸気車に乗ったことがきっかけだ。日本にも鉄道が必要だと思ったからこそ、鉄道敷設に必要な学問を選び、学んできた。土木も化学も。今の日本になにをもたらしたらよいか、近代化を象徴するものはなにかと悩んでおられたから、鉄道がいいと伊藤さんにいったでしょう？」

井上は身を屈めて、伊藤を睨めつける。伊藤はたじろぎながら、「そうだ、そうだったな」

と、頷いた。

「僕は、英吉利国で知り合った商人に頼んで、鉱山はむろんのこと鉄道の見学にも赴きました。日本が欧米諸国に比べて遅れているのは明らかです。英吉利国が初めて蒸気車を走らせたのは、今から四十五年ほど前です」

蒸気車は石炭や鉱石を輸送するために造られ、十里（約四十キロ

メートル)の鉄路を走った。日本は、文政八年(一八二五)、徳川幕府が、日本近海に現れる異国船を脅威とみなし、異国船打払令を出したときだ。

「伊藤さん、僕らは攘夷が叫ばれている最中、英吉利国に渡った密航仲間ですよ」

文久三年(一八六三)五月、長州藩主毛利敬親の世子元徳は、若く有望な藩士を選び、英吉利国へ遊学させた。伊藤俊輔(博文)、井上聞多(馨)、山尾庸三、遠藤謹助と、野村弥吉(井上勝)の五名だ。鎖国政策をとる幕府は外国への渡航を禁じており、発覚すれば密航者として処罰される危険もあった。かつて伊藤の師で、松下村塾を開いた吉田松陰が、密航を企て投獄されている。

二十九歳の井上聞多を最年長に、最年少の井上勝は二十一歳。危険より、処罰より、彼ら五名を衝き動かしていたのは、新しい知識への渴望だった。

「伊藤さんと大隈さんは、国をどうしていくか、どう動かしていくか考えてくださればいい。異国との交渉と借款に、存分に頭を働かせてください。僕は、鉄道敷設の現場で、養った知識を生かしたい。日の本初の鉄道にかかりたい。僕は、人の器械となる。この国の器械となる。その覚悟で帰国したのですから」

汽笛は鳴らされたばかり、なにもかもがこれからです、と井上は

力強くいった。

「では、酒屋に行ってください」

この時、井上勝、数えの二十七歳。

一年後の明治三年（一八七〇）閏十月、工部省が設置され権大丞に任命されるまで、伊藤や大隈のために助言を惜しまず、鉄道敷設に向けて奔走する。

## 二

明治三年の松の内を過ぎてまもなく、弥市は、森田屋に誘われ、築地ホテル館の見物に出かけた。

築地ホテル館の完成は、慶応四年（一八六八）八月だったが、幕府瓦解の煽りを受け、仮営業を経て、翌明治二年十一月に正式に開業した。明治元年に東京が開府し、築地の鉄砲洲を拓いて外国人居留地が出来たが、築地ホテル館は居留地内で一際目立つ建物だった。

木造瓦葺きで、一部は塔屋を含めた四階建て。窓の外側にはバルコニーというものがあり、西洋風の佇まいではあるが、外壁は漆喰のなまこ壁、軒先には風鐸と、西洋と日本を融合させたホテルだった。絵図面を引いたのは亜米利加人だが、ともにかかわった清水屋喜助の矜恃も感じさせた。

このホテルは評判を呼んで、錦絵も数え切れないほど版行された。いわゆる開化絵というやつだ。開業してまもなく、弥市も絵草紙屋で三代歌川広重の物を買求めた。

お仲は「お父つつあんが造ったのね」と感激し、お蝶も「横浜の異人館よりもきれい」と、ふたりで大はしゃぎだった。義母も感慨深げに眺めていた。

「まあ、おれひとりで造ったわけじゃねえしな、おれは川の浚いだの、壁だの屋根だの差配しただけだ。眼に見えるような造作はしてねえからな」

と、照れ隠しにいったものの、こうして家の者が喜んでくれる仕事が出来ることが嬉しかった。土工請負は、人の眼に見えるような華々しい物の方が少ない。

見えるどころか、土台となって隠れてしまう物がほとんどだ。神奈川台場は見える物だが、華があるわけじゃない。

けれど、家族ばかりか、こうして万庶が喜ぶ仕事はやはりいい。人々の笑顔や感謝は素直に受け取るべきだと感じた。それがなにより励みになる。

ふた株買って二百両出したが、これで損が出たとしても、清水屋を恨むまい。むしろ、皆に誇れる仕事を与えてくれたことをありがたく思う。



ホテルは、あまりに見物人が多いため、門番を立て、ついに見物料まで取った。清水屋も商売人だ、と感心した。

とはいえ、ご一新の波を受けてしまったのは、清水屋も運が悪かった。なんとといっても肝心要の幕府が潰れてしまったのだ。

もともと、ホテルの普請中も大変だった。普請の費用は約三万両。が、清水屋自身が用意したのは五百両。それに加入者からの金を足しても、潤沢な資金がないのだから、手間賃や資材の払いが滞る。儲けが出るまで待てといっても、無理な話だ。職人たち百名ほどが、普請場近くに建てた扱所に連日催促に押し掛けた。ほとほと困り果てた清水屋の代理人柳屋伊右衛門が弥市にこぼしたこともある。そこで、弥市は道楽の狂歌を詠み、

「いつきてもうそをつきじの扱所あす払ふとはうまく伊右衛門」

扱所の真ん中に貼り付けた。

職人たちはそれを見るや、大笑いして引き揚げた。助かりました、と伊右衛門が頭を下げたが、茶化された本人から礼を言われるのはおかしくもあり、気の毒でもあった。

だが、それが功を奏したのもいつときで、すぐにまた職人たちが伊右衛門を責め立てた。

ともあれ、築地ホテル館が東京の新名所になったのは確かだ。

ただ、築地鉄砲洲の居留地は、横浜と比較するとやはり活気がな

い。

それもそのはずだ。異国人は、まず船で横浜に着き、そこから東京に出てくる。異人が駕籠かごを使うことはあり得ない。やはり馬か、そういえば乗合馬車もあるが——六郷川ろくごうがわ（多摩川下流）は架橋かきょうされていないから渡し船だ。いまは、船で品川沖まで来ているのかもしれない。

だとしても、とホテルを見上げながら、弥市は考えた。

東京と横浜を繋ぐつな鐵路が出来たなら、異人も東京に来ることがもつと容易たやすくなる。居留地ももつと賑やかになるに違いないのだ。

そういやあ、冬にお偉いえらさん方の寄り合いがあつたはずだが、どうなつたのか。鐵路は必ず敷かれると、肥後七左衛門ひごしちざえもんは自信を持っていたが、いつから普請が始まるのか、いまだなにも報せしらがない。

もし、安達屋久治郎あだちやひさじろうに報せが入っていれば、すぐに使いが来るはずだ。

まだ待つしかねえのか。

いやいや、きつともうすぐだ。

まあでも、異人が蒸気車に乗って東京に押し寄せて来たら、東京の連中は驚くだろうなあ。おれはご一新の前から横浜と江戸を往復しているから、もう異人にすっかり慣れたが、東京の奴やつらはどうだろう。皆、居留地の異人を見て、おっかなびっくりしている。

きつと、蒸気車が走るようになったら、さらに東京の風景は変わるのだろうと、弥市は黒い煙をはきながら進む鉄の車を思った。

「いやあ、それにしても、なまこ壁の見場がいいなあ」

森田屋が周りに聞こえよがしにいった。近くにいた見物人がうんうん頷くのを見やって、森田屋は鼻をうごめかす。

きつと森田屋も胸を張れる仕事が出来たという満足を得ているのだと思った。

弥市は懐紙と、矢立から筆を取り出し、さらさらとその場で書き付けた。ホテルの見物料がいくらであるのかなど、覚え書きだ。

「弥市さん、この頃よく筆を出すね」

森田屋がちらりと、弥市の手元を覗き込む。

「ああ、若い頃から日記をつけているんだが、どうも歳を取ってから、あったことをすぐ忘れちゃうんでね。こうして外でもちよいちよいと書き付けておくのさ」

「へえ、まめだね。もつとも、弥市さんは見積もりの一文二文もこだわるから、もともとそういう真面目な性質なんだね」

「いやいや、これはもう癖みてえなもんさ。けど時々、書いておいても忘れちゃう。歳は取りたくねえなあ」

「そうだな」

冗談めかしていったつもりだったが、森田屋の返事がどこか暗か

った。

帰り道、八丁堀沿いをゆるりと歩きながら、

「最後にいい仕事をさせてもらったよ。それがいいたくてね、今日、誘ったんだ」

森田屋がしんみりいった。

「なんだえ藪から棒に。最後の仕事ってのは」

弥市は苦笑しながら、聞き返す。

「薩州屋敷や神奈川台場、町場の大店の修繕や普請を散々やってきたが、おれはこのホテルで請け負いから身を退こうと思う。弥市さんからこの話を聞かされた時から決めていたんだ。もう隠居して孫の面倒でもみようかとね」

「なにをいうんだい。ずっと一緒にやってきたじゃないか。それこれから東京は変わるんだぞ。空家の武家屋敷をなんとかしなきゃならねえし、おれたちの出番はまだまだある」

弥市は森田屋を励ますように、とんと背を叩いた。

「新政府のお偉方なんぞ、おれたちの倅みたいな歳じゃねえか。そういう奴らが政をやるうってんだ、年寄はもうお呼びじゃねえよ」  
「おれだって、そう思わなくもねえよ。ご一新の波をくらって、請け負い仕事もぱったりなくなかって、いつときはやる気が失せた。け

どよ、おれは——」

弥市はそこで口を噤んだ。鉄路のことは、まだ口外無用と肥後にいわれている。森田屋とは、死んだ出雲屋と伊予松山松平家の出入りとしてともに仕事をしてきた、台場も造った仲間だ。しかし、鉄路の敷設に必ず携われるとは約束出来ない。

森田屋が、白い物がめつきり増えた鬢を撫でる。

「おれあ、もう歳だ。気力がめつきり減っちゃまってなあ。髪だけじゃねえ、湯屋にいつてよ、ふと見たら、下の毛にも白髪があつた」  
寂しそうな表情で視線を下げる森田屋を見て、弥市は思わず大笑いした。

「笑わせるんじゃないよ」

弥市をうらめしそうに見た森田屋もぷつと吹き出した。

「ほんとのことだから、いったんだ。がつくりきちまってよ。いくら気張っていったって身体は正直だつてな」

「当たり前えのことをいってどうするよ。五十年近く生きてりや、あちこちがたがくる。皺も出来れば、下の毛だつて白くなるさ。けどよ、ご一新をおれらは乗り切ったんだぜ。若い奴らがこの国をどう動かすか、お手並み拝見だ。明治の世つてのを見なきや面白くねえ」

はあ、と森田屋が溜息を吐く。

「おれが、さつき歳は取りたくねえとかいったからかい？　ありや、深い意味なんかねえよ。年を重ねりや、歳は取る。そういうことだよ」

森田屋は、首を横に振る。

「弥市さんはどうだい。前にもまして活き活きして見えるよ。そんな秘訣があるなら、教えてもらいてえもんだ。若い妾でも困っているのかね？」

虚を突かれて、弥市はぐつと顎を引く。お蝶のことは仲間にも内緒にしている。森田屋が力なく笑って、眼を細める。

「そうかいそうかい、羨ましいな。まあ、そつちももう氣力がねえ。おれは、家族もちゃんと守って、ある程度の身代も築いた。家長としてやることはやったから満足だ。あとは、倅と娘婿に頑張ってもらうさ」

そうか、と弥市は呟いた。

弥市は跡継ぎとして期待していた長男を亡くし、次男、三男も病で逝った。五男、六男は里子に出し、今手元にいるのは四男の徳松と七男の松之助だ。徳松は数え十二になったが、松之助はまだ七つ。跡継ぎを考えるには早すぎる。

「ああ、悪かったね。長男坊が生きてりや、もう二十歳を過ぎていくかね」

ふっと弥市は笑う。

「死んだ子の歳を数えても詮無いことさ。そんなことしたら、あいつがかわいそうだ」

「そうだなあ」

と、芝口橋を渡りきると、森田屋が足を止めた。「おれはここから駕籠を拾って帰る。今度は飯でも食おうや」と右に折れた。

背を向けた森田屋が妙に年老て見えた。それが、ひどく哀しくて、弥市は思わず大声で呼び掛けた。

森田屋が振り向く。

「どうしたい、弥市さん」

「藤助さん、またでかい仕事があったら、一緒にやろうな」

「なんだよ、武家屋敷を打ち壊して更地にするような仕事か？ そりゃあ、でかいな。倅にいつてやってくれよ」

「いいや、あんただ。あのホテルが最後だなんていえなくなるようなでかい仕事だ。目の玉がひっくり返るような請け負いだ」

森田屋が肩を揺らした。

「やつぱり、弥市さんは元気だなあ」

「おれは、本気だよ。ホテルで満足しちゃ駄目だ。まだまだ、だ」  
「ありがとうよ。気長に待ってるよ」

気長じゃねえよ。必ずだ。必ず、また一緒にやるんだ。鉄路を敷

くのは国の仕事だ。そうだ。きっと江戸中の請負人がかき集められるに違えねえのだ。とんでもない数の人間がかかわる。おれが、必ず森田屋を引き入れてやるからな。

弥市は拳を握り締めた。

弥市は森田屋と別れ、露月町をひとり歩いた。明治になったとはいえ、町並みは変わらない。

勝さまと薩摩の西郷隆盛の会談がうまくいったからか。江戸の総攻撃で火に包まれていたら、あたりはどうなっていたか。

それでもまだ町はいい。海沿いにある広大な陸奥仙台松平家屋敷、陸奥会津松平家屋敷はすっからかんのもぬけの殻。そんな大名屋敷、武家屋敷が東京にはごまんとある。

すでに新政府の施設に使われている物もあるにはあるが、東京の七割を占める武家屋敷はどう処理するのか。

うう寒い、と弥市は襟巻きを巻き直して歩く。梅の花が咲く頃とはいえ、まだまだ暖かい春は遠そうだ。

弥市は、延びた東海道を眺める。

ところで、鉄路はどこを通すのであろうかと考えた。東海道に沿って敷くとしても、町中を突っ切るわけにもいかない。陸側に通すとしたならば、このあたりには、町屋もあれば、増上寺もある。



さすがに寺の中に鉄路を通すまいが——いや、増上寺は徳川家の菩提寺だ。新政府にとつては、江戸の遺物にすぎないのかもしれない。それに、天皇を戴く国なので、なんでも神道にするとかしないとか、神と仏と分けるとか触れが出ているという話もある。

寺など無用となったら、増上寺など特に、ああ、もうひとつの徳川の菩提寺である寛永寺も潰されちまうかもしれない。もつとも、寛永寺の方は先の上野の戦でほとんどの堂宇が新政府の攻撃でやられちまったから、更地にするだけだが。

上野戦争の翌朝、弥市は、怖いもの見たさで見物に行った。江戸の町で戦が起きたのは初めてだ。弥市が物見高いわけではなく、江戸の者たちはおっかなびっくりしながらもこぞって出掛けたのだ。黒門には無数の弾痕が残っており、それを見ただけで弥市は震え上がったことを覚えている。弥市の身近でも、熱海の温泉の店を譲った者の身内が上野戦争に出た。

残党狩りがあったが、それをかいくぐって無事に戻ったと報せがあったときは胸を撫で下ろした。

薩州屋敷出入りの弥市は、あの戦のときは、なんとも複雑な気分だった。徳川に味方をする方も、維新回天を目指す側も、どちらも傷ついてほしくないと願っていた。

結局、もうひとつの出入りだった徳川家親藩の松山松平家は、抗

戦せず、恭順きょうじゆんを選んだ。殿さまも若殿も無念だっただろうが、息災そくさいでいてくれるはずだと思っていた。世話になった柴田しばたもきつと無事でいるに違いない、と。

ご一新がこの国のために間違いでなかったのだということ、いま政の中心にいる薩摩や長州の旧藩士たちに知らしめてほしい。多くの大名が苦渋くじゆうの決断を迫られ、多くの人々が血を流した。その責任が新政府にはある。

世は再生の繰り返し——。

土工請負人として長年携わってきた弥市はそれを肌はだで感じていた。壊れた物を修繕し、古い物は壊して新たに建て直す。

そうして、世の中は回り、止まることがない。

ご一新が成ったいまの世は、急激な変化を求められている。

先に行く欧米諸国に追いつけ追い越せとばかりに急いでいる。

鉄路がその先駆せんくとなる。時代の変わり目だ。

おれは、その真まっ只中ただなかにいるのだと感ずる。

しかし、陸路なら、本当に増上寺だいもんの大門前あたりに通すのだろうか。そうになると、うちの雑穀屋ざつこくやがある宇田川町うだがわちやうの側そばを通ったりしてな、とひとり想像して、くつくつ笑った。通りすがりの振り売りの魚屋が顔をしかめた。

弥市は咳せき払いして口元を引き締め、さくさくと歩を進めた。

やはり、海側だろうなあ。武家屋敷が建ち並んでいるが、いまはほとんど使われていない。潰してしまえばいい。

ああ、そうだそうだ。六郷川はどうするのだ？

六郷川は江戸の初めの頃には橋が架かっていたという。しかし、六郷川には堤つつみがなく、護岸工事がされていないために洪水こうずいに見舞われやすかったらしい。その度たびに架橋補修を繰り返すうち、幕府は橋を諦あきらめた。代わりに渡船場が造られたという。しかし、此度こたびは諦めるわけにはいかないだろう。だとしても、数珠じゆずのように連つらなつた鉄の車を支えられる橋はどれだけ頑丈がんじょうな物になるのか。

はあ、と思わず溜息が出た。

なにもわからない弥市が考えても、これだけ出てきてしまう。もつともつと難題があるのかもしれない。やはり、途方もない大仕事だ。だが、それだけに、心おどが躍る。

では、起点はどこだ。居留地が出来たから、築地のあたりか？ それとも、五街道の始まりにすれば、やはり日本橋か。そこから鉄路を延ばし、江戸の出入り口であった高輪おおきど大木戸に至り、品川へと延びる。

鉄路の下に敷く土はどこから運び入れるか。どれだけ堅かたく地ならしをするか。盛り土に必要な土はきつと途方もない量になる。

待て待て、おれが何里にも亘る鉄路をやるはずもない。大勢の請

負人に割り振られることになるのだろうが、どこを任せられるのか。はたと、弥市は立ち止まる。宇田川町の自分の店をいつの間にか通り過ぎていた。増上寺は眼と鼻の先だ。こいつは参ったと苦笑して、踵かかとを返したときだ。

「いや、だからな、娘。ここに蒸気車が走るんだ。え？ 蒸気車がなんだかわからん？ 大きな鉄の車だ。鉄の道の上を走って行くんだよ。乗ってみたいと思わないか？」

茶店ちやみせから大声が聞こえてきた。

確かに蒸気車といった。弥市はそろりと茶店に近づく。

見れば、黒い上着うわぎに、立襟たてえりの白い中着なかぎ、洋袴ようばかまに革靴かわぐつを履はいている。髪も短く、異人と同じいでたちで、身体も大きい。しかしどう見ても、日本人の男だ。まだ若そうだ。二十代の半ばなかを過ぎたくらいか。茶汲ちやくみ娘は、店の奥に隠れ、顔だけ出して話し続ける男を怖々こすこす窺うかがっている。

「まあ、蒸気車を知らんのも無理はない。でもな、そいつに乗れば、横浜はんとまきまで半刻はんこく（約一時間）もかからず着いてしまうんだ」

そういつて茶を啜すすった。

「あの、もし」

弥市は思わず声を掛けていた。

洋装の男は井上勝と名乗った。

「蒸気車の話が聞きたい」というと、茶店の縁台に座っていた男はいきなり立ち上がった。ずいぶんと背丈せたけがあった。弥市は見下ろされる形になったが、こちらに向ける真ま直すぐな視線に、「悪い男ではない」と感じた。

それよりなにより、井上は少年のように紅潮こうしほして、

「ようやく出会えた。嬉しいぞ」

と、弥市の手を取り、両の掌てのひらで強く包み込んだ。

初めて男にこのように手を握られ、背筋が騒いだが、井上は弥市の様子など意にも介さず、

「なにが知りたい、なにを聞きたい」

と、口角泡こうかくあわを飛ばして勢い込んだ。

弥市は、宇田川町の料理屋に井上を誘った。小体こていな料理屋で弥市の行きつけだ。断られるかと思いきや、「行こう行こう」と井上の方が乗り気になった。

女将おかみに、奥の小部屋へ通してもらい、酒と肴さかなを頼み、そこで互いによろやく名乗りあった。たったいま、知り合ったばかりの井上勝

という洋装の青年をなぜ酒に誘ったのか。

ただ、このままあの茶店で別れたら後悔すると、弥市は思ったのだ。それがどうしてかもわからない。直感というものか、天啓か。ともかく、この青年と話がしたかった。

酒が運ばれてくると、井上は上着を脱いで、「猪口でちまちま呑むのは性に合わん」と、女将に井鉢を持ってこさせた。それになみなみ酒を注いで、舌舐めずりすると、ひと息に呑み干した。

「ああ、うまい。日本の酒はやっぱりうまい」と、たちまち空の銚子が並んだ。

こいつは、とんだうわばみだ、と弥市の呟きが聞こえたのか、

「僕はね、呑んで乱れる呑乱と渾名されるほどの酒呑みだ。養家の野村姓をもじったものでね、倫敦にいた頃、当時の友人がつけてくれたんだよ」

ろんどん？ 弥市が不思議な顔をする、

「英吉利国にある都の名ですよ。学問を修めるために五年ほどおりました」

井上が応えた。

弥市は思わず知らず身を乗り出した。

「遊学していたんなら、本物の蒸気車を見たんですか？ 乗ったんですか？」

「ええ、乗りましたよ。それに鉄道敷設の現場でシャベルも振るつた」

「て、て、鉄道の普請場に行ったんですか？ 蒸気車は鉄道というんですか？ その普請場でしゃべるってのがわかりませんが、ともかくそこで働いたこともあると」

「そうです。でも、嬉しいなあ。今日は、銀座からここまで歩いて、蕎麦屋や茶店に入る度に蒸気車のことを口にしたが、誰もが僕を気味悪げに見てきた。洋装が珍しいこともあるのでしようがね。皆に警戒されました。軍服じゃあないのですが」

あはは、ときも楽しそうに笑う。

「先日、湯屋に行ったときのことです。二階に上がり、湯上りの男たちに向かって、蒸気車の話をしたら——」

箱に人を乗せて運ぶなど、伴天連の妖術だ。

煙を吐かれたら、あたりも身体もいつも真っ黒になって、儲かるのは湯屋だけだ。

「と、まあ、そんな具合で、猛反対されました」

井上は短髪の頭を掻いた。

「伴天連は妖術など使わないのですが、そう思われるのも仕方がないでしょう。なんたって、いまだ日本は人力以外の動力がほとんどないに等しい。蒸気船がやっつのですが、それすら、どういう仕組み

であるのか理解している者などほんの一握り。湯を沸かした湯気で鉄の塊かたまりが走るわけがないってね。爆発するんじゃないかと怖がっていた人もいました。そうした不安を解消し、安全な乗り物であり、どれだけ暮らしに利があるか、まずそこを知ってもらいたいからです」

弥市は、ぼかんと口を開けた。

この青年は一体、何者なのか。

「で、平野屋ひらのやさんは、どうして蒸気車に興味をお持ちで？」

ああ、それは、と弥市は亜米利加国へ行った人から話を聞いたのがきっかけだと話した。日本にそれが走ったらと思ひ描くも、自分の頭では想像がつかない。その後、書物で蒸気車の画えを眼にし、これはやはりすごい物だ、これが日本にもあれば物人も運ぶことが容易になる、これまで費ついやしていた時間が短縮される、仕事も楽になると弥市はおそらく親子ほども歳が離れているであろう井上に熱っぽく語りかけた。

「おお」

と、井上が井鉢を乱暴に置いた。

「まさにその通りですよ。僕は本当に嬉しい。こうして蒸気車に興味を持ってくれる人をひとりでも多く増やしたいと思っているのです」



うんうん、と井上は一人合点して幾度も首肯する。

「差し支えなければ、亜米利加国へ行つたというのはどなたですか？ 僕も知っている方かもしれません」

いや、それはと弥市は口籠もる。勝の名を出せば、次は弥市を何者なのかと質してくるに違いない。土工請負だと明かしても一向に構わないが――。

「あつしは横浜によく出向くんで、飯屋でちよいと会つただけでお名前までは」

と、ごまかした。

「なるほど、そうでしたか。でも活きた話が聞けたのはよいことです」

疑いもしない井上に、弥市は申し訳なさを感じつつ、青年も変わり者だと思つた。なぜ弥市を信用してついて来たのか。名だけで、互いの素性もいわない。奇妙な縁だ。けれど、嫌な感じは微塵もない。

弥市はそこで、ようやくはつとした。蒸気車の話をあちらこちらで説いて回っているということは――まさか新政府の役人か？

だとしたら勝の名を伏せたのは賢明だったか。しかし、政府の役人がこのように歩き回っているはずもないか。

弥市は、心の内で苦笑しながら、酒を呷る。

「先年、米不足に陥おちいったでしよう？」

弥市を窺うかがってきた。大雨で米が不作になったのだ。米価が倍以上にも跳ね上がり、一時は粥かゆばかり続き、腹が減へって困こった。

「あのとき、政府は清国しんから米を輸入した。ですがね、越後えちごで穫とれた米を迅速しんそくに東京に運はったなら——米の収穫高が少ないので、すっかり解消するとまではいかずとも、米価の高騰こうとんは防ごげた。なぜ、東京に米が運はりなかつたか。その手段がないからですよ。ですが、鉄道を網あみの目めのように広ひろげていけば、あらゆる所に、大量に物を運はび、届とけることが可能になる。国境こくがいなどありませんから、困こった地域には、すぐ対応出来る。すなわち国をひとつにまとめることが出来る」

はあ、と弥市は猪口ぶちぐちを持ったまま井上を見つめた。

「そ、だから、平野屋さんのいったことは政そのものです。国の施し策さくが民に恩恵たまを与える。暮くらしやすくなる。そして国も豊かになる。新しい国造りに鉄道が不可欠なんです」

ああ、素晴すばらしい、と井上は天を見上げるようにひとり悦えつに入いっていた。

「ですが、日本中に鉄路を敷きくなんてことが出来るんですかね」

弥市は恐おそる恐おそる口にした。今、耳みみにしているのは、東京く横浜間の敷設しきせつだけだ。これが網の目状あみまじょうに広がるなど、弥市には途方もないことに思おもえた。

とはいえ、井上ならばその不安を吹き飛ばすようなことを口にするだろうと期待していた。が、

「幾年かかるか正直わかりません」

これまで張りのあつた声が、くぐもつた。

「人々の理解は、ひとまず置いておくとしても、まず金がかかります。日本にはまだ蒸気車そのものがない。蒸気車を走らせる線路もない。すべて、英吉利国から買い付けることになるでしょう。さらに、鉄道敷設のための職人です。これも異国人を雇います」

「けど、井上さんは異国の普請場でしゃべるつてのを振るつたことがあると」

「ほんの手伝い程度です。僕にとつて鉄道は、己の夢を運ぶ路でありましたから懸命に学んできました。でも、僕ひとりの力ではやはり無理です。鉄道敷設にかかわつた熟練者が必要です。しかし、異国人を頼り続けていては困る。自力で鉄路を拓けるようにならないと。日本の土地に合つた鉄路を日本人が敷かねばいけません。異国の知識技術を学び盗んで、やがては日本人だけで蒸気車を造り、鉄路を敷けるようにすることが、僕の望みです」

なるほど、と弥市は得心しつつ、銚子を取り、井上に傾けた。

「蒸気車つてのは、二本の鉄路の上を走らせる物じゃねえですか？

あんな重そうなのをどうやって支えているんです？ 平らな道に

ただ鉄の棒を置けばいいってもんじゃねえのでしょうか？」

ん？ と井上が井鉢を手に取りながら、眼を見開いた。

「平野屋さんは面白いなあ。そうです。蒸気車の重さは一概いちがいにはいえませんが、石炭など入れておおよそ二十三トン——我が国でいうと、そうですねえ」

頭そろばんの中で算盤はじでも弾いているのか、井上が顔をしかめる。

「ええと、米俵こめだわらには、三斗とから四斗入ります。仮に四斗とすると、重さは十六貫六十キログラム。それが三百八十ほどあると思っていただければ」

げえ、と弥市は仰のけ反そった。大きい、重いと考えてはいたが、三百八十俵とは。

「鉄道を敷くにはまず強固な路盤ろばんが必要です。これが崩れたら、敷いた線路が傾き、蒸気車は脱線する」

考えただけで恐ろしい光景だ、と弥市は身震みふるいする。

「鉄道は、蒸気車を通すことそのものを指しますが、線路は、路盤きどうと軌道きどうからなっています」

あ、そうだ、と井上が訊たずねてきた。

「平野屋さん、懐紙と矢立はお持ちですか？」

「ええ、まあ」

弥市が取り出すと、井上は懐紙を板の間に広げて、筆を走らせた。

まず台形を描き、その真ん中に横に一本線を引くと下方を黒く塗りつぶし、上方は小さい丸をいくつも記した。最後に台形の上に横長の四角と、間隔を開けた小さな突起をふたつ乗せた。

「あまり画はうまくありませんが、これは線路を縦に切ったものです。このふたつの突起が鐵路です。突起の下の横長の四角は鐵路を支える枕木、小さな丸の部分は道床です」

弥市は身を乗りだして井上の画に見入った。これが線路の造りか。すげえ、すげえ、こんなふうになっているのか、と気持ちが高揚する。これをおれが造るんだな。この井上ってお人もたいしたもんだ。異国できつと頑張ったんだらうな。この人がどんな素性だらうと、もう構うことはない、ともかく話が聞きたいと弥市は思った。

「黒く塗ったところが、先ほど申し上げた路盤、道床と枕木、鐵路を軌道といいます」

井上は、台形の図の横に、線を引き、路盤、軌道、そして鐵路と書き入れた。

「この丸は、砂利とか小石ですかね？」

弥市が指差すと、井上は、大きく頷いた。

「道床は、路盤にかかる重さや、蒸気車が走る際の振動を受け流す非常に大切な役割をしています。ですが、やはり路盤がしっかり造られていないといけないことがわかりますよね」

「つまり、鉄路を乗つける土台ってことか。たしかに、屋敷を建てるときも土台は肝心だ」

弥市はひとり言のように呟いた。

「そう、なんでも土台は大切です」

井上はその呟きが聞こえたのか、嬉しそうにいう。

「ああ、気分がいいなあ。こんなふうに線路のことまで話せるなんて」

弥市は、うんと唸って、腕を組んだ。

「まったくすげえもんだ。砂利や小石で、重さとか振動が散らせるもんなんですよ」

「まあ、たとは悪いですけど——板の間の上に井鉢を落としたら割れるが、布が敷いてある上なら、壊れずに済む、というようなことです。むろん、鉄道ではもっと色々複雑な計算もあります。蒸気車の重さと走る速さが、どれだけ線路に負荷をかけるかという」

弥市は頭を抱える。

「そういうのは、お任せします。私の頭じゃ難しくて、お手上げだ。けど、蒸気車に乗るってのはどんな気分なんで？」

「うん、少々音がうるさいし、揺れるし、風向きによっては煙が客車に入り込んでくることもある」

井上は顔をぐっと突き出して弥市を見つめた。

「でも、たまらなく気持ちが高揚する。窓の外の景色がどんどん飛んでいく、その速さも魅力的だ。しかし、目的地にあつという間に着いてしまうという利便性だけではない。蒸気車に乗って、別の土地に移動する、見なれた風景が次第に、見知らぬ土地の景色になる。それを車窓から、眺める楽しさ」

井上は、一旦、言葉を切った。

「鉄道敷設は、近代日本の象徴、中央集権国家確立の手立て、という至極もつともな理由がある」

弥市は、真顔になった井上を窺うように見る。どんな言葉を継いでくるのかと、なぜか肩に力が入る。すると、井上は相好を崩し、「が、僕は鉄道がともかく好きなんだよ。それに尽きるのだ。英吉利国で目の当たりにしたときから。大きくて、速くて。自分の手で造れたら、日本に鉄道を通せたら、と、それだけを考えていたんだ。夢に見るほどにね」

少年のように瞳を輝かせた。

弥市は、ふうと力を抜いた。

なんとも正直なお人だ。

弥市は自分も夢に見た、とはいえなかった。素直に心情が吐露出来るこの青年を羨ましく思った。英吉利国で鉄道を学び、こうして日本に戻り、その実現を夢見ている。

もつと若ければ、井上から知識を得たいと願っただろう。網の目のように鐵路が走り、繋がる未来の日本の姿をもに巡<sup>めぐ</sup>って見ることが出来たかもしれない。

その頃まで、生きていられたらいいと思った。

けれど、歳が離れていようと、熱情に溢<sup>あふ</sup>れた井上<sup>もと</sup>の下で働きたいと思った。

弥市にとつても、夢見る鐵路であるからだ。

井上は喉<sup>のど</sup>が渴<sup>かわ</sup>いたのか、酒をぐいと呑み、口元を手の甲で拭<sup>ぬぐ</sup>う。

「とはいえ、新しいことを始めるには、まず周知させること、それから理解が必要です。平野屋さんのような人ばかりではないのです。

これが、一国の仕事となればなおさらです。強制的に許諾<sup>きょだく</sup>させるのではない。理解され、そして、賛成してもらうこと。まあ、政ではひとりひとりに眼を向けるなど不可能だが、常にひとりひとりの民と向き合っている意識<sup>せいじ</sup>でいることが政事を主導<sup>しゅだう</sup>する上で、大切だと思っ<sup>おも</sup>っています。それはきれいごとだと、大隈さんは笑いますが。半ば強制しても、結果を出せば民は納得する。だが、泥を被<sup>かぶ</sup>る覚悟は必要だ、とね。僕は、英吉利国にいたので戊辰<sup>ぼしん</sup>の戦に至<sup>いた</sup>った経緯<sup>いきわづ</sup>はよく知りません。確かにひとつの政權をひっくり返すには、力で押し切るのが手っ取り早い。果たして、それが正しかったのか、否<sup>いな</sup>か。それは、これからの政府次第でしょう。だったら、腹を切るぐらい



でいてほしいと、僕は思います。上に立つ者が覚悟を示さなければ、下の者は動かない」

ま、それもきれいごとかもしれません、と井上は青柳あおやぎのぬたを口に放り込んだ。

弥市は、ふと首を傾げた。井上の口からさりげなく出た名に聞き覚えがあった。肥後七左衛門がいつていた鉄路敷設を推進しているお偉い方の名がそれだったような。確か、旧佐賀藩のお人だ。もうひとり、なんといったか、伊藤、博文。旧長州藩士だ。確か英吉利国に密航した人物だ。

この井上勝という青年は——やっぱりそうか。

弥市の背にふつりと汗が滲にじんだ。

「そうだ、平野屋さんは、このあたりに住んでいるのでしょうか？僕は明治になってから帰国して、東京に来たのですが、まだまだ土地のことがわかりません。鉄道好きというのも何かの縁です。東京の案内をしていただけないでしょうか？」

井上がいったが、弥市の耳には半分も聞こえていなかった。

——井上勝。

なぜ思い出せなかったのか。肥後がその名を口にしていただけではないか。

「英吉利国の公使の通詞つうしを務めたつてのは、井上さん、お前さんだ

ね」

声を震わせながら訊ねると、井上が眼を見開いた。

「ええ、そこで鉄道敷設がまず決定しました。その後に、廟議があつて鉄道敷設が進められることになったのです」

そうか、決まったのか。肥後はどうして伝えてくれなかったのか。

久治郎にも報せねば。

身体の血が沸き立つ。

「あの、平野屋さん、なぜ僕が通詞をやっていたことを知っていたのです？」

井上が狐きつねに摘つままれたような顔をしていた。

「そんな細かいことは、いいじゃねえですか。ああ、ありがてえ。さ、呑みましよう、井上さん」

弥市は呆気あつけにとられる井上の井鉢せきに、酒を勢せきいよく注そそいだ。

#### 四

明治三年三月、英吉利国人技師、エドモンド・モレルらの来日と同時に、鉄道敷設のための測量が開始された。

二十五日、起点となる汐留しおどめに杭くいが打たれた。旧播磨龍野脇坂家上はりまたつのわきさか屋敷を汐留停車場として、旧陸奥仙台松平家上屋敷、そして旧陸奥

会津松平家中屋敷が構内、あわせて約六万三千五百坪が用地になる。ついに鉄道工事が始まる。十一月の廟議での決定から、すでに四ヶ月。この間、新政府は用地の買い上げ、鉄道敷設の周知に懸命になつていた。

弥市たちは、昨年、肥後七左衛門の下、品川八ツ山下を切り、仮橋を架けた。橋を久治郎が、土工を弥市がそれぞれ受け持ち、地面を二十尺（約六メートル）ほども掘り下げて、橋を渡したが、その土は鉄路敷設に用いることになるという話を聞き、すでに敷設事業にかかわっていたのを知って、久治郎とともに胸を詰まらせた。

いよいよ始まる、と弥市は心を躍らせた。

鉄道敷設工事は、かつて、幕府の普請奉行支配下にあつた棟梁や請負人が携わることになった。先の品川台場にかかわつた連中がほとんどで、その請負人がさらに、下請けを募り、工事によっては入札が行われた。

弥市は、請負人山中政次郎に呼び出された。政次郎は土佐藩出入りの鳶頭を務め、狭気溢れる人物として、旧土佐藩山内容堂侯の覚えもめでたい人物だ。旧土佐藩の推挙で鉄道敷設に名を連ね、汐留停車場の普請にも携わる。

政次郎宅を訪れると、養子の重太郎と、やはり汐留停車場普請にかかわる大野屋吉五郎が同席していた。

「平野屋さんのことは、薩摩の肥後さまから聞いた。すでに鉄路敷設の届けも出しているっていうから、声を掛けさせてもらった」

政次郎が煙管キセルに刻みきびを詰めながら、弥市を見る。もう老齡の政次郎だが、かつては侠客きやうかくとしてその名を馳はせたという男の視線するどは鋭かった。

五十の声も間近、荒っばい人夫にんぶたちの差配もしてきた弥市だったが、政次郎には気圧けおされた。

「先の品川の八ツ山の架橋は、安達屋との仕事だったそうだな。あすこあたりはおそらく停車場がおかれることになる」

停車場というのは、蒸気車が停まり客の乗降が出来る場所だ。

「平野屋さんは、品川と神奈川の台場にかかわったと聞いている。そういうお人じゃねえと、この鉄路は通せねえと思ってよ」

政次郎が煙草タバコの煙を吐いた。弥市はその言葉にわずかに引つかかりを覚えた。が、台場普請は土を入れて、固めて造る。井上から聞いた路盤が強固でなければならぬのならば、弥市のような土工が必要なのだろうかと思ひ直した。

「実はな、薩摩のお出入りだった梅田半之助うめだはんのすけさんとは昔馴染みむかしなじだろ  
う？」

「ええ、私とはともに薩州屋敷の普請、修繕にかかわっております。ご一新の騒ぎで、とんと会ってはおりませんが、政次郎さんは

「ご存じで？」

かかか、と笑い声を上げた政次郎は、長火鉢ながひばちにとんと煙管はいの灰を落とした。

「ご存じもなにも、此度の東京く横浜間をふたりで請け負っているんだが」

弥市は眼を見開く。

「半之助さんは、今じゃ横浜の顔役でな。あっちを請け負った。ほれ、平野屋さんは神奈川台場を造っている。だから、半之助さんが欲しがってな。元仲間だからと、引かねえのよ」

半之助さんが、おれを。

「けど、おれも引けなかった。どうしたって、あなたの腕うでが欲しい。おれも含めて、今度の話は政府から直じかに請け負った。けどよ、おれもそうだが、ほとんどの者が、蒸気車も鉄道も見たことがねえし、知りもしねえ。政府の役人に呼び出されて、散々、蒸気車の事を聞かされた。お雇い異人のなんとかモレルとか、ああ、そうだ、その通詞の井上とかいう役人に、蒸気車の模型もけいを見せられて、朝から晩まで、話をされた」

井上さんか、と弥市は政次郎に気づかれないように、顔を伏せ、笑みえをこぼした。きつと、熱っぽく鉄道について語ったに違いない。と、顔を再び上げたとき、重太郎と眼まなこがあった。重太郎は弥市を咎とが

めるような眼を向けた。まだ三十ぐらいか。たしか町火消しの息子で、縁あって政次郎の養子になったと聞いている。

少々、陰のある眼つきが気になった。

「ま、そいつはいいんだが、な。あんた、その井上って役人と知り合いなのかえ？」

「とんでもねえことで」

弥市は慌てて否定したが、実は、井上とは三度ほど、東海道を歩いている。

その折に聞かされたのは、鉄道敷設反対の声の大きさだった。

「やはり、鉄道を敷く周辺住民の反対は予想通りでしたが。旅籠、駕籠屋、馬方、飛脚たちは、暮らしがたたなくなると。わからなくもないが。先日、伊藤さんが賊に襲われたくらいでね。むろん、無事でした」

賊に襲われたとは穏やかではない。

「おそらく兵部省あたりの血の多い者でしょう。兵部省は、軍の用地周辺の測量は行わせない、異人を入らせるなど言語道断。まあ、軍用地が海側にありますから、海防の要衝の意味がなくなると、取りつく島もない」

高輪の大木戸を抜けて、しばらく行くと薩州屋敷が見えてくる。

街道沿いにある下屋敷だ。

「あれも厄介ですよ。まさか、屋敷の中を通すわけにはいきませんしね。こちらも、大反対を受けています」

会津や仙台的屋敷は壊せても、維新の立役者である薩摩島津家の屋敷には手を出せないということか。そもそも兵部省の西郷隆盛は旧島津家中の人間だ。

「平野屋さんは、薩州のお出入りだったのでしょ？ 仲介してくれませんかね？」

「滅相もねえ」

「ははは、冗談ですよ。こんなことで頓挫させるわけにはいきませんからね。国を挙げての大事業を完遂させなければなりません。そうしないと日本の近代化はますます遠ざかる」

井上は、そう力強くいった。

政次郎の話の様子では、すでに敷設の予定地は決まったように思えた。兵部省も薩州屋敷も納得したのだろうか。

「でね、平野屋さん」

政次郎のしわがれ声に、弥市ははっと我に返った。

「おれが、どうしてあんたを欲しがったか——芝口から、品川八ッ

山下までの鉄路は——」

海上を通す。

弥市は言葉を失った。

「海に堤を築いて、その上に蒸気車を走らせるってんだ」

「どうやって？ 台場は火砲かほうを設置するだけの台地だ。しかし、蒸気車を走らせることが出来る堤。そのような頑丈なものが造れるのか？」

政次郎は、弥市の動揺など気にせず、芝く品川間ほどではないが、横浜も海上に堤を造ると続けていった。

「あんたは、神奈川台場を頭となって請け負った。それに、井上って役人から聞かされたんだよ。蒸気車が好きな土工請負がいるってよ。それがあんただ。だから、おれはなにがなんでも、半之助さんには渡したくなかったんだ、わかるかい？ 安達屋久治郎にもおれの下請けをしてみよう」

頼むぜ、と政次郎がふっと笑みを浮かべた。

弥市は、承知しました、と頭を下げ、政次郎宅を辞した。

履物はきものに足を通していき、背後に足音がした。

「お養父とつつあんは、ずいぶんあんたを買っているようだが、隠居間近の爺じいいに、この大仕事が出来るとか、おれは不安だがね」



重太郎が鼻先で、ふんと笑った。

「普請場では、おれが差配することになる。まあ、足許をしつかりしてくれよ。しくじって海で溺れ死んだら、洒落にもならねえからな」

弥市に、ぐつと顔を近づけ、

「足手まといは御免だぜ」

唇を皮肉つぽく曲げた。

弥市は久治郎とともに、芝口に赴いた。

海の測量をすると、政次郎から使いが来たのだ。

ふんと潮の香りがする。目の前は、網干し場だ。揚がった魚を仕分けている者たちと、日焼けした肌をさらし、使い終えた網を物干しに掛けている者が幾人もいた。海鳥たちが、魚を狙って、旋回している。その鳴き声とさざなみの音が聞こえる。遠くには、まだ舟が幾艘も出ていた。午後の早い陽が海を照らす。

雲母を散らしたように輝いていた。

芝から高輪、品川までの海岸線一帯は、漁を生業としている者が多く、当然、魚屋を営む者もいた。

だが、この海岸線に沿って堤を築いてしまうと、漁師たちは海に出られなくなる。鉄道敷設に反対していると、政次郎から聞いてい

た。

生活が出来なくなる。駕籠屋や馬方が反対するのわからなくはない。客が蒸気車に奪われるからだ。しかし、漁師や魚屋も同じだ。

仕事が奪われる。国の事業は多くの人々に恩恵をもたらすが、こうして恩恵からこぼれ落ちる者たちを確実に生み出す。

大きな事業になればなるほど、その陰で見捨てられる庶民もいる。新政府が、耕地、家作、武家屋敷など鉄道用地として買い上げたその代金は約十六万両にのぼると耳に入っている。買い上げてもらえるならばまだいいが、この漁場はどうするのだろうか。

お役人はそうした者たちに眼を向けられないものかと思う。弥市は少しばかりはしやぎすぎていたかと、自戒する。じかい

「どうしたもんかな、測量はないのかね」  
久治郎が口にした。

今は干潮だ。かんちよう 遠浅の海なので、この海岸線は歩いて渡れる。ここに堤を築くと聞かされたときは、声も出なかった。が、神奈川台場を考えれば出来ないことはない。

あそこも遠浅の海だった。品川もだ。

しかし、数里に亘る、長く延びた頑丈な堤を築くのは、やはり容易ではない。幅もどれくらいになるのか。路盤が大事、その言葉が弥市の頭を巡る。

ともあれ、よくぞ海に鉄路を通すと考えたものだ、と弥市は感心した。一体、誰が進言したものか。

「あ、あれじゃないか。ほら、五、六人が固まって何かしている。ちようど網で遮られていたんだな」

久治郎が指さした。

饅頭笠を着けた羽織袴姿の役人に混じって、膝まで伸びた黒い履物を着けた洋装の異人がふたり、海になにかを突き刺して、縄を引いている。

と、大声が飛んだ。異人が怒鳴っている。役人たちは頭を下げ、すぐに別の動きをし始める。そこにまた怒声が飛んだ。役人のひとりが転んで、しぶきが上がる。異人たちが大笑いした。海の中を歩いているのだ。袴も海水を含んで重たいだろう。

「なんだえ、あいつら。助け起こしもしやがらねえ。偉そうにしやがって」

久治郎が齒嚙みした。

測量に携わっているのは、旧幕府の作事方だ。

請負人もそうだが、新政府は人材を旧幕府に頼りきりだ。

「さて、茶でも飲むかね。喉が渴いた」

弥市は、遠くに見える異人たちを睨めつけている久治郎を促した。  
高輪へと歩きながら、久治郎は文句を垂れた。

「そりゃあ、異人に頼らなきゃ鐵路が敷けないのはわかる。けど、ああして威張いばられたら、従いたくないな。あいつら、日本人を見下していやがる。海の上の堤の普請も異人にうるさくいわれたら、嫌になる」

「そうだな。人夫たちと喧嘩騒けんかぎを起こしたら、大事おおいでになる。しかし、もう日本人は台場を造っているからな。基礎はある。異人の進んだ技術を取り入れて、さらに強く築けばいい」

「弥市さんは、腹が立たねえのかい？」

「いちいち腹を立てていたら、工事が遅れるだろう？」

「結局、足許を見られているんじゃないかねえかな、異人によ」

そう腐くさるな、と弥市は笑いかける。

井上の言葉を思い出した。

「異国の知識技術を学び盗んで、やがては日本人だけで蒸気車を造り、鐵路を敷けるようにすることが、僕の望みです」

今は我慢だ。測量の手伝いをしている役人も、そうして覚えていくしかないのだ。これまでなかった物を造るのだからな。まあ、しかし、土工の現場はどうだろうか。異人が訳のわからない言葉で怒鳴ってきたら、口喧嘩の得意な江戸っ子たちがどういい返すか。少々楽しみではあるが。

しかし、と久治郎が空を仰いだ。

「こいつは、とんでもねえよな。東京中の土工、大工、左官、石工、  
鳶、屋根葺きがずらりとかかわってる。通常の普請などやってる場  
合じゃない」

「そんな大きな仕事が出るんだ。ああ、そういや土と石をどこか  
ら集めるか、考えないとならないな。人夫の数も相当だ」

「弥市さんは三千はいけるかい？」

「けどなあ、東京中の棟梁、請負人がすでに人夫たちを囲っている  
だろうな。となると、常雇い者を含めていまは五百」

久治郎が息を吐く。

「おれも、そんなものだ。足りないな」

「土と石、それから材木。まずは、石の切り出しだ。長さ三尺（約  
九十センチメートル）、一尺四方の石が四万個必要だと、政次郎さん  
からいわれている」

「四万か。山がひとつなくなりそうだな。当てはあるのか、弥市さ  
ん」

「おう、神奈川台場そうしゅうまなづるのときに世話になった、相州真鶴村あおきやの青木屋たばだ」  
相州の六つの村は、上等な石が採れる。青木はその束ねをしてく  
れた。

「土は、八ツ山、御殿山ごてんやまの切り崩しになるだろうな」

「まずは、土と石だ。それがなけりや堤は築けない」

石の手配をどうするか、そう思ったとき、森田屋の顔が浮かんだ。森田屋は、神奈川台場のときに青木屋と顔を合せている。都合がいい。すぐに声を掛けよう。息子でなく、藤助に赴いてもらう。

ふと、久治郎が思い出したようにいった。

「聞くところによると、高島屋たかしまやの嘉右衛門かえもんさんが横浜の埋め立てを引き受けるそうだ」

ほう、嘉右衛門さんが海上の堤を請け負ったのか、と弥市は眼を丸くした。

「なんでも、『高島屋』って旅館が当たりしたそうじゃないか」

それは嘉右衛門からの文ふみで知っていた。昨年、尾上町おのえちように建てたばかりの和洋合わせた建物で、新政府の高官がよく泊まりに来るらしい。横浜の英国公使館、異人館の普請や埋め立てを請け負い、旅館も繁盛はんじようしてなかなか羽振りがよさそうだ。そのうち横浜に来てくれとあったが、いずれ蒸気車で行くか、と弥市は心の内で笑った。

始まりだ。

弥市は、街道から海を眺めた。

堤の上を蒸気車が走る。その姿を思い描きながら、

「久治郎さん、茶でなく、酒にしねえか。景気付けた」

そう声を張った。

(つづく)